

かねた ふみお
金田 文夫

自治労・書記長

35年を振り返って今思うこと

私は72年に函館市役所に入職し、すぐ青年部役員になってからこの4月で35年になる。今は57歳で定年も近い。自分なりに35年間を振り返ってみた。

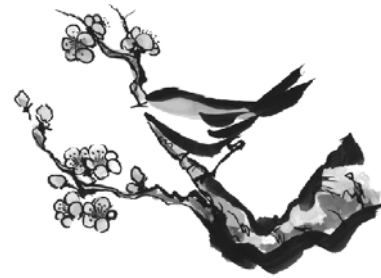
まず役員となったきっかけであるが、ひとつは家族の影響だ。父は国鉄の機関士をしており当時の動力車労組の地方本部役員を、そして、母はその家族会の役員をしていた。小学生のころは60年安保闘争等もあり、よく母につれられてデモや国鉄線路上での座り込み等を見に行ったことが強く印象に残っている。また、兄が同じ市役所に入職し、役員をやっていたことも影響した。もうひとつ、私が在学していた70年前後は学生運動が華やかで、私もその片隅に身を置いていたこともきっかけとなったと思っている。最近ではこんな環境は皆無に近いのではないかと、振り返ると改めて時代の違いを思い知らされる感じである。

さて、私の運動歴は、単組で12年、北海道本部で19年、中央本部で4年目である。

振り返って最も印象に残り、今でも心のどこかでしっかりと引きついでいるのは、なんと言っても運動に入った単組での経験である。それは、嘱託（非常勤）・臨時職員労組の組織化と、清掃事業の委託民間労組の組織化、その両労組の仲間と共に運動したことである。当時の函館市では正規

職員の2割近い1500人を超える非常勤の嘱託職員や断続長期雇用の臨時職員が劣悪な賃金労働条件と雇用不安の下で仕事をしてきた。当時の先輩役員がこの待遇の改善と底上げが必要との思いで組織化に取り組んだのである。今から約30年前のことであり、当時まだ正規職員の待遇条件も未整備の部分も多い状況だったこともあり、「なぜ組合はそんなところにエネルギーを使うのか」という声も多くあったように思う。今にして思えば正に画期的な取り組みだったと言える。この種の取り組みは自治労内でもはじまったばかりであった。この組織は、約150人でスタートし、5年ほどで400人を超える組織となり、現在もその数を維持している。もちろん賃金労働条件や雇用安定も着実に前進させてきた。ただし残念なのは、この組合がいろんな事情から自治労加盟にいたらず、連合地協の直加盟にとどまっていることである。やはり結成と同時に自治労加盟できなかったことが今日まで続いたわけで、連携や共闘は前進しているものの、大きな課題を残していると言える。

もうひとつは委託民間清掃労組を2つ組織したことである。ここも極めて劣悪な賃金労働条件下に置かれており、その改善は直営の市職員との同一職群の待遇均等化から不可欠であるとの立場で



組織化に取り組んだ。この2労組は、結成後、数年を経て自治労に加盟し、地域で市職労と共闘会議を組織して共に運動を進めて成果を収めている。また、地域の中小共闘の要役としても大活躍していることもうれしい限りだ。

これらの取り組みは私の少し先輩の役員が手がけたものであり、その結実と成長過程に関与することができたものである。現在、これらの格差解消、パート対策、中小対策が労働運動全体の最重要課題となっていることを考えると、単組の先輩役員の方々の先見性には改めて頭の下がる思いである。

私はこの単組での経験を北海道本部でも生かして取り組んだ。北海道本部で臨時非常勤等連絡会議を結成し、その後協議会へと発展させた。また、自治体の委託や関連する公共サービスエリアの労組で民間労組協議会を組織化した。そして、その中に個人でも加入できる清掃事業分野の環境ユニオンと福祉事業分野の福祉ユニオンを設置すること等の取り組みに、直接又は間接的に関与できた。この取り組みにも一部に抵抗感があったようだが、少しずつではあるものの組織化と待遇改善が進んできたと思っている。

その後、中央本部において、公共サービスエリアのパート労働者も含めて民間中小労組を組織化

している産別である「全国一般」との産別統合問題を担当させてもらうこととなった。歴史と伝統ある全国産別との統合は容易ではなかったが、3年がかりで2006年1月に正式統合が実現できた。ただし、県本レベルはあと2年後になる。自治労はこの統合で8万人弱の中小民間労働者を組織する公務民間複合産別として生まれ変わったと言える。連合がめざす地協運動強化すなわち地域労働運動の強化と前進に向けて、今年の春闘から文字どおり自治労がその一翼を主体的に担う立場で、パート共闘、中小共闘に結集し、全力をあげたいと思っている。

くり返しになるが、労働運動・自治労運動35年目を迎えて一番心に残るのは、単組運動が原点であるということである。その意味するところは、公共サービス労働者はもとより、全ての労働者に今で言う「ディーセントワーク」を確立していくことこそが私達労働組合運動に求められていることを、私の先輩達が30年以上も前からしっかりと実践していたことである。この思いを痛感している。私の運動人生は残り少なくなっているが、運動に身を置いた時の原点を決して忘れずに厳しい状況にあるこの1年間の任務に、あたっていく決意である。